

高梨氏館跡発掘調査 概 報

1990-3

中野市教育委員会

高梨氏館跡発掘調査 概報 正誤表

頁	位置	誤	正
目次	28行目	入り口・門	入口・門
10P	下から3行目	金100	金子100
11P	2行目	金 5000	金子 5000
21P	1行目	入り口・門	入口・門
31P	2行目	な地が現れ	な池が現れ
	3行目	築池に	築地に
45P	下から4行目	皇宋通宝	皇宋通宝
46P	下から7行目	石臼・硯	石臼・硯・砥石
48P	8行目	また、奈良国立	また、文化庁・奈良国立
51P	下から7行目	柴屋幹宗良	柴屋幹宗長
52P	2行目	政盛	政頼

高梨氏館跡発掘調査 概報

1990-3

中野市教育委員会



1 高梨氏館跡（航空写真）

序

高梨館は、中野市街地の傍らにありながらも、郷土を愛する人びとの努力によって荒らされることはなく、全国でもめずらしいといわれるほどに原形を良く残し、昔の面影を伝えてきました。

この館跡は、東方に控える鴨ヶ岳の山城跡とともに、戦国時代に北信地方で活躍した有力武士高梨氏の全盛時代の遺構を示すもので、まことにこの地方の歴史を語るうえに欠かせない、貴重な歴史遺産であります。よって昭和44年7月3日付けで県の史跡に指定されました。

この館跡については、これまで大切に護ってこられた高梨家にかわって、こんど中野市が都市計画法に基づく近隣公園「高梨館跡公園」として整備することになり、平成元年度から工事に着手しました。

公園整備にあたっては、昔の面影を残す貴重な史跡として、往時ができる限り再現する方向で遺跡の保護を優先させ、その活用をはかることにしました。そこで、遺跡の確認と公園整備事業の資料を得るために、昭和61年度に試掘調査、発掘調査を62年度から平成3年度までの計画で進めています。

さて、今回の調査によって館の状況はかなり明らかになってきました。つきましては、調査の途中ではありますが、市民各位に一層の关心と理解を深めていただきたく、ここにその成果の一端を概報としてまとめることにしました。なお刊行については、湯本軍一調査団顧問に監修していただきました。

最後になりましたが、この調査にご指導・ご助言をいただいた高梨館跡公園整備専門委員ならびに発掘調査団の先生方をはじめ発掘調査にご参加いただいた方々、その他ご協力くださった多くの方々に衷心からお礼申し上げます。

平成2年3月

中野市教育委員会

教育長 嶋田 春三

例　　言

1. 本報告書は、昭和61年度（1986）から行なった、長野県中野市小館にある、長野県指定史跡高梨氏館跡の試掘調査および発掘調査にたいする、平成元年度までの調査概報である。
2. 調査は、中野市教育委員会が主体となって行なうが、その組織は次の通りである。

顧問	長野県史協議委員・山ノ内町文化財保護審議会委員長	金井 喜久一郎
"	長野県史(中世史担当)編纂委員・法政大学史学会評議員	湯本 軍一
調査団長	中野市文化財保護審議会会长・日本考古学协会会员	金井 汲次
調査主任	日本考古学协会会员	檀原 長則
調査員	"	田川 幸生
"	"	関孝一
"	"	郷道哲章
"	"	土屋 積
"	長野県考古学会会员	池田 実男
"	"	酒井 健次
3. 現地調査には多くの作業員の協力があったこと、なお多くの研究者や全国の参観者から、貴重な助言や協力をうけたことを深謝します。
4. 本報告書は、金井喜久一郎・湯本軍一・金井汲次の指導により、檀原長則・徳竹雅之が執筆・編集した。
5. 本報告書作成のための製図やトレースの作業は、池田実男・酒井健次・湯本栄一・栗原よしみ・山崎のり子が行なった。
6. 写真撮影は、檀原長則・徳竹雅之が行なった。
7. 本報告書は、現時点での概要であり、調査により出土した遺物の整理や、図面類の分析・検討などの成果は、都市公園整備事業と併行して行なう発掘調査の終了をまって、正式に報告書として刊行する予定である。
8. なお、本報告書の性格上、執筆にあたっては県史・信濃史料その他多くの文献を参照したが、表記は省略させていただいた。

目 次

序	
例 言	
第I章 高梨氏館跡と保存の経過	1
第1節 立地条件と館跡の現状	1
1 位 置	1
2 館跡の現状	3
第2節 保存の経過	4
1 尾張高梨家を迎る	4
2 新たなる保存へ	6
第II章 高梨氏の歴史	7
第1節 高梨氏の盛衰	7
1 高梨氏の出身および同族	7
2 中野地方への進出	8
3 高梨氏の最盛	9
4 高梨氏の落日	9
5 高梨氏故郷へ帰える	10
第2節 高梨氏と京文化	10
1 幕府要人との交際	10
2 連歌の宗祇・宗長の来館	10
3 三条西実隆に学ぶ	10
4 宮中への献金と叙位	11
5 石山本願寺を訪れる	11
第III章 高梨氏館跡の発掘調査の概要	13
第1節 遺構	13
1 建 物	13
2 庭 園	15
3 入り口・門〔南面入口・西面北入口・西面南入口〕	21
4 築地塀	28
5 堀	32
6 土 堆	35
7 その他の遺構	39
第2節 遺 物	43
1 土器類	43
2 陶器類	44
3 その他（銅製品・鉄製品・石製品）	45
第IV章 史跡の保存と活用	48
第1節 公園整備の基本方針と専門委員	48
第2節 公園工事計画	49
第V章 高梨氏と中野地域に関する略年表	50

挿図目次

1. 高梨氏館跡の位置	1
2. 鶴ヶ嶽城要図	2
3. 高梨一族の所領概略	7
4. 館跡と調査区	12
5. 庭園実測図	16
6. 南面入口調査区実測図	20
7. 西面北入口実測図	22
8. 西面南入口実測図	25
9. 南面入口の東側土壘断面図	30
10. 古銭拓影図	31
11. 館跡と遺構の実測図	42
12. 館跡出土遺物実測図	47
13. 高梨館跡平面基本計画図	49
24. 同入口北側の石積みの崩落状況	23
25. 西面北門礎石上の炭化物	24
26. 同五輪塔の空輪部分出土状況	24
27. 銀の出土状況	24
28. 西面南入口全景	26
29. 西面南入口内側の南袖石	27
30. 同入口の北袖石と暗渠	27
31. 同入口の南土壘内側の梶石積み	27
32. 西面南入口南側の石積み・排水路	28
33. 同入口北側の石積み	28
34. 南面入口東側の土壘断面	29
35. 漆喰？あと	29
36. 南面入口西側の土壘	30
37. 南方からみた南面入口の小さな池	31
38. 同入口西側の柱穴跡	31
39. 鍵層の古銭出土状況	31
40. 東面の土壘と堀跡	32
41. 発掘調査前の北面土壘と堀跡	33
42. 発掘調査後の北面の堀跡と断面	33
43. 西面北入口の土橋北側の堀跡と土壘	34
44. 同入口南側の空堀断面	34
45. 南面入口東側の空堀断面	34
46. 隅櫓があったとみられる西北の土壘	35
47. 西面北入口の土壘内側の石積み	36
48. 北面土壘西側断面	36
49. 北面の土壘南内側の調査地点	37
50. 同中段の石積みと武者走り	37
51. 東面の土壘内側の石積み	38
52. B地区の水溜跡	39
53. 水溜跡Aの遺物出土状況	39
54. 水溜跡Aの断面	39
55. 水溜跡A出土遺物	40
56. 中央部北の雨落ち遺構と水路	40
57. 中央部北の水路の敷石	40
58. 井戸北側の水路	40
59. 南面入口内部の礎石	41
60. 館内中央東の試掘坑	41
61. 出土遺物	43
62. 東面入口内側の中世土器の集中出土状況	44
63. 北面土壘基部の中世土器集中出土状況	44
64. B地区常滑窯系陶磁器の出土状況	45
65. B地区古銭出土状況	45
66. 銅製の釣針	46

表目次

1. 古銭一覧表	31
2. 館跡出土遺物表	46

写真図版目次

1. 高梨氏館跡	卷頭
2. 館跡からみた鶴ヶ嶽城	2
3. 嘉永年間修復の井戸内部	3
4. 普代集落からみた館跡	4
5. 高梨政道書状	4
6. 中野町切図	5
7. 調査風景	13
8. 焼けた礎石	14
9. 礎石	14
10. 館跡中央部の礎石群	14
11. C地区の礎石	14
12. 西方からみた庭園の全景	15
13. 発掘調査前の庭園	17
14. 池の景石	17
15. 池の南側に立つ大きな立石	17
16. 滝口付近の石組み	18
17. 池の南側部分	18
18. 東側からみた庭園	19
19. 庭園東の水溜跡	19
20. 発掘調査前の南面入口	21
21. 西面北入口の門の礎石	22
22. 西面北入口南側の石積み	23
23. 同入口北側の石積み	23

第一章 高梨氏館跡と保存の経過

第1節 立地条件と館跡の現状

1. 位 置

善光寺平（長野盆地）の北端をさえぎっているのは、コニーデ式の形容をした高社山（1,352m）である。その南方に広がるのは中野扇状地で、三国山脈に連なる上信越国立公園、志賀高原から流下する夜間瀬川によって形成されたものである。

この扇央左寄りに中野市街地がある。東方は、志賀高原の山から派出した支脈によってさえぎられ、山ノ内町との行政境界となっている。この支脈の尾根上に、館跡の詰城として南北約500mにわたる鴨ヶ嶽の山城跡がある。標高688.3m、比高差約300mで、いたる所に段郭などが残されている。

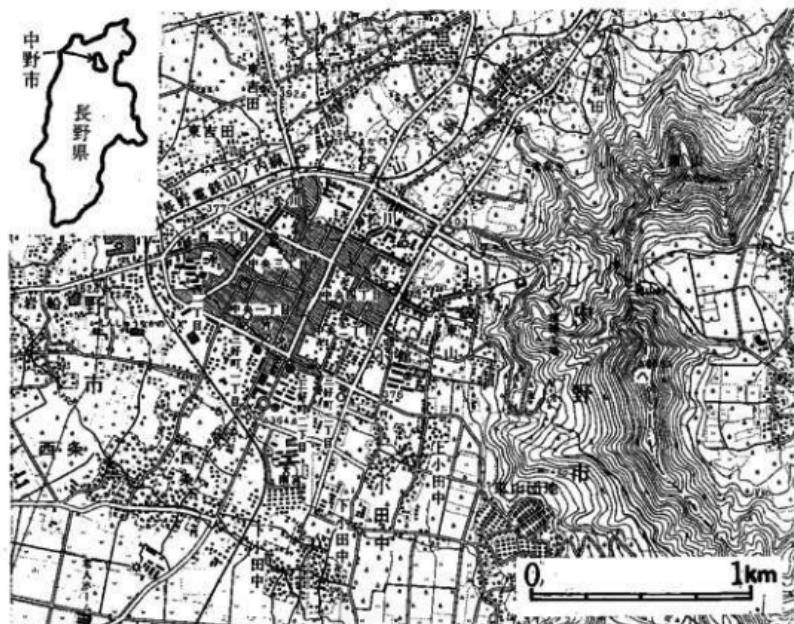


図1 高梨氏館跡の位置

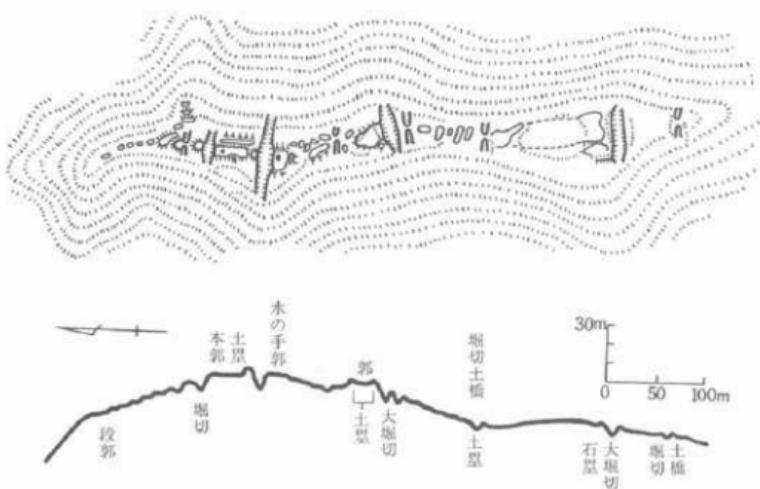


図2 鶴ヶ城要図



2 館路からみた鶴ヶ城

2. 館跡の現状

この西麓約300mの位置、すなわち中野市街地の東寄りの中野市小館にあるのが、高梨氏館跡である。この館跡および山城跡は昭和44年（1969）に長野県史跡に指定されている。

館は現状方彌単郭をなし、東西約130m、南北約100mの規模で、土塁は四周に残っているが、空堀跡には一部人家がある。

発掘調査前の状況は、郭内の東南に庭園の庭石が残っていて、前が窪地となっていたので庭園の埋没が想定されていた。また野面積みの井戸（深さ約9m）も存在し、嘉永年間に改築したことが傍らの碑文に記されている。

館の西北隅の土塁はや
や高く、井戸か隅櫓の存
在が想定される。南北隅
も以前は高かったが、今
は削平されて低くなつた
と言われており、あるいは
ここにも櫓があったもの
かもしれない。この
土塁は内側の地表から1
～3mの高さで残ってい
る。この空堀は南・西面

3 嘉永年間修復の井戸内部

がかなり埋没している。北面の空堀は諏訪町の宅地化によって幅が狭められていると考えられる。比較的、旧状を残しているのは畠地に面した東側で、堀はV字形（薬研堀）を呈している。

館内の入口は三か所あるが、西面入口は北寄りにある。この入口の北側は、近世末～明治初年ごろ館内の耕地化に伴って掘り出された石礫を裏込めとした石積みで、幅2m程の通路となり、入口の堀の部分は土橋となっていた。

南面入口は、やや西寄りながら中央部にある。そこには土橋があって両袖の土塁面には、新しい土留め石積みがあり、通路幅は約2.5m、現住の高梨家や稻荷社などの入口として使用されている。東面入口もやや南寄り、ほぼ中央部に開口し土橋となっている。明治9年（1876）の中野町の切図では、ここから山城に向かう道路が描かれている。

内郭部の広さは西辺60m、北辺86m、東辺78、南辺86m、面積は約6000m²である。東辺が長く台形状を呈し、東南部に庭園・稻荷社がある。この南側の土塁は鍵形となって、幅が3mほど広がっている。

郭内中央北寄りに高梨家の居宅があるが、現在は西側に移転するため住宅新築中である。

その他の大部分は畠地となっているが、作物は麦類・大豆の栽培から桑園・りんご園・アスパラ栽培へと変遷している。

郭内は東北部が最高所で、標高 385.6m、西南部が低くて 383.4m、西南面に傾斜して 2m の高低差がある。

第 2 節 保存の経過

1. 尾張高梨家を迎る

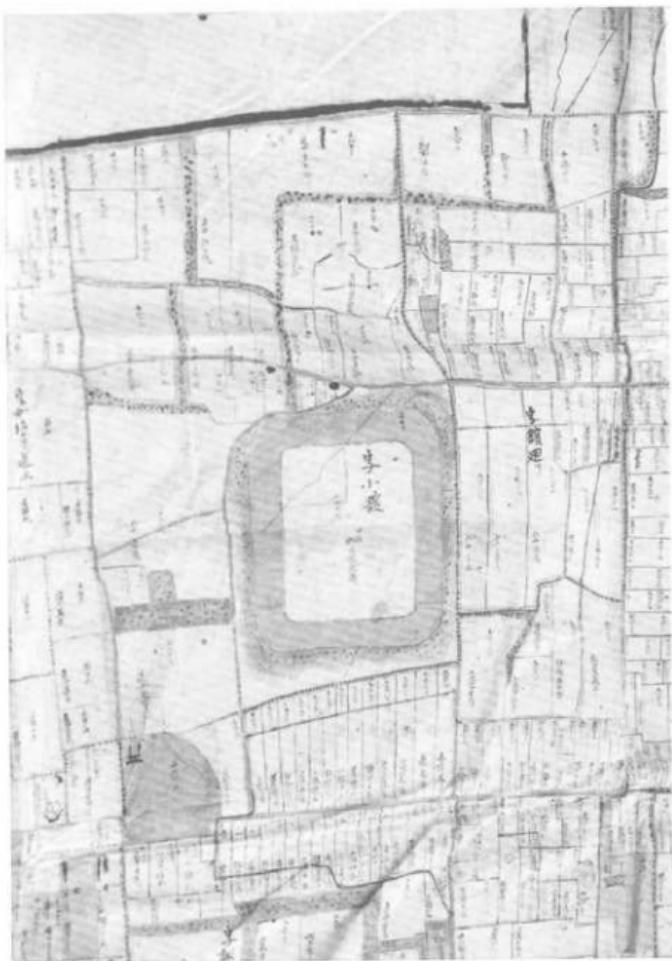
明治 7 年（1874）、この館跡は、地租改正にともない官有地となるが、高梨家にゆかりあると伝えられる人々の尽力により、民有地への下げ戻しが実現した。明治 9 年 1 月の中野町切図には、畔上源兵衛がこの館跡地の



4 普代集落からみた館跡



5 高梨政道書状（山ノ内町 畔上大栄門氏所蔵）



6 中野町切図（明治 9 年）

世話を人と記されている。同年、これらの人々が愛知県から尾張藩士族（尾張高梨家）の高梨政道氏を招請した。こうして慶長3年（1598）上杉景勝に従って会津へ去って以来、館主空白となっていたこの館跡に、高梨一族の後裔が居住することになり、当主で4代目となっている。

2. 新たなる保存へ

市街化区域にありながらも、これまで高梨家の努力によって保存してきたこの館跡も、このたび、故あって一部を残し中野市の管理するところとなった。永年護られてきたこの史跡をどのような形で保存し活用すべきかの課題を負って、昭和61年（1986）秋から試掘調査を市教委の組織する調査団によって開始され、以後毎年継続実施されてきている。

昭和62年には、今までの発掘調査の結果をとり入れて都市計画公園として整備する基本計画を策定した。こうして保存・保護を目的とした館跡公園として、これからは遺跡の発掘調査の結果と調整をはかりながら、整備専門委員・県教委文化課と協議のうえ、事業を進めて行くことになっている。

第II章 高梨氏の歴史

第1節 高梨氏の盛衰

1. 高梨氏の出身および同族

高梨氏が史上に現わるのは、平安末期である。寿永2年（1183）木曾義仲に従っていた高梨高信・海野幸広らは、備中水島で平重衡軍と戦って敗死、翌年、義仲四天王の一人とされた高梨忠直も六条河原で刑死している。平安末期には、現在の須坂市から長野市にかけての地域に武士団として成長していたようである。

この高梨氏の出自については、今のところ定説がなく、(1)室町期にできた『尊卑分派』によれば、高梨氏は清和源氏の源頼季（頼信の子）を始祖とする井上氏（須坂市井上）の支族であるという。そして高梨（須坂市）を苗字の地として、開発領主に成長したもの、(2)越後地方から信濃川沿いにさかのばって高井郡に入り、成長した武士団、(3)古代豪族の阿部氏が奥羽地方へ遠征の後、小布施地方（上高井郡）に土着し、後に高梨氏と称したなど高梨氏の成長過程は今後の研究課題であるが、鎌倉時代の高梨氏の所領で確認されるのは、東条莊山田郷駒場（高山村）・北高梨（小布施町か）・林臣（不明）・上浅野（豊野町）・倉井（三水村）・小島郷（長野市）などである。南北朝期（14世紀）には、現在の長野市を中心にして小布施町・高山村（上高井郡）・豊野町・三水村（上水内郡）の地域に領地を持ち活躍しているから、土着の経緯はともかくとしても、須坂市付近から発生、長野市にかけた沖積地帯を基盤として成長した武士団であったと考えられる。

この高梨氏は、系図に記されたところによると、頼季—満実—盛光となり、その子、忠光が奥州から帰って山田（高山村）に住んだので、「山田高梨」と呼ばれた。盛高の系統は、「本郷高梨」と呼ばれ、後年、中野地方とかかわりを深くする。

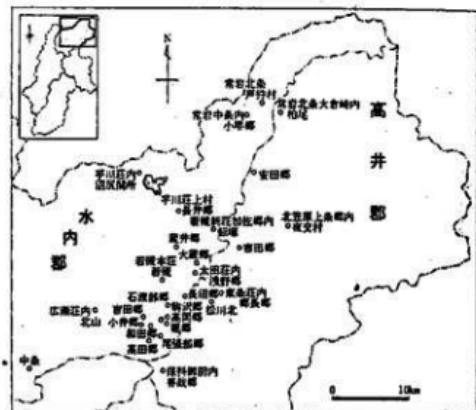


図3 高梨一族の所領概略(14~15世紀はじめごろ)

暦応元年（1338）高梨経頼・経家は、山田郷小馬場村（前出）の田畠論争を一族衆中にて裁判を行い、総領制の結合の解体期にあたり一族結合の再編強化を図っている。

この頃の高梨氏の本拠地は、小布施町付近と推定され、明徳3年（1393）の高梨氏の所領書き上げによれば、南北朝の内乱以後は、その勢力が、山ノ内（下高井郡）・岳北（高社山以北）に及び、延文2年（1357）には、高井郡吉田郷（中野市）を取得したのをはじめ、応安3年（1370）には、同安田郷（飯山市）、大藏郷（同）を取得し、以前から領有していた常岩中条内小境郷（飯山市）、常岩北条戸狩郷（同）を合せて、岳北方面に所領を拡大している。

応永7年（1400）信濃守護小笠原長秀の入部をめぐって信濃国全体をまき込み、長野市篠ノ井附近を戦場として争った（大塔の合戦）。このとき反守護勢の中心に高梨軍団があり、その旗頭として高梨藤守友尊（朝高）が500余騎を従えていた。村上氏に次ぐ大勢力であり、草間氏（中野市）・木島氏（岳北）もその傘下として出陣している。

宝徳元年（1449）には高梨一族の領主15人が、所領の支配をめぐって相互の紛争を未然に阻止するため、農民対策などについて10か条の協定を結び、同族連合を図っている。本家を中心としながらも、分家が自立化を図っている姿である。このうち戦国時代に入るころから、後述するように、本家は分家や親類の領主を家庭化して権力を一手に集中し、戦国領主として発展していくのであった。

2 中野地方への進出

寛正4年（1463）、当時、信濃は信濃守護と越後守護により分割支配されており、北信濃は越後の上杉氏が支配していた。上杉房定の一族、上杉右馬頭が、鎌倉公方足利成氏側の高梨政高・村上氏に対抗して、新野氏（中野市）・大熊氏（同）と結んで、高梨氏の本拠地（小布施町）近くの高橋（中野市西条と新保の中間）に攻めこんで合戦となつた。このとき、上杉右馬頭は高梨政高に討ちとられ、新野・大熊氏も没落してしまう。

こうして、高梨氏の勢力はますます強大となり、かねてから足がかりのあった中野地方に、さらに大きな基盤をつくった。

北信濃も応仁の乱（1467）前後から、戦国乱世の時代となつた。文明8年（1476）には高梨政盛が家督を継ぎ、同16年（1486）高野山参詣で不在中の高梨高朝（山田高梨）の山田城を攻めおとし、高梨治部少輔に高井郡江部村を与え、明応6年（1497）には、高井郡計見郷（木島平村）の地を高梨高秀に与えている。同9年（1500）、夜交景園に下上条（山ノ内町）・西条・岩船・新野の高遠（以上中野市）を安堵している。

このように、高梨氏は中野を中心に勢力圏を着々と築くが、この頃、政盛は間山の石動の館から中野の館に移ったとも伝えられている。

3. 高梨氏の最盛期

永正4年（1507）、越後守護上杉房能は、守護代長尾為景と戦って敗れ、越後頸城郡天水^{あまみず}で自害するが、このとき政盛は為景に加勢して出兵した。

翌年7月、関東管領上杉憲房は、弟房能の仇討のため越後守護上杉定実、長尾為景を討とうとして越後に侵入、政盛らは為景に加担し、志久見口・白鳥口（信越国境）から越後妻張庄（津南町）に攻め入った。

同6月、長尾為景の軍は椎屋（柏崎市）で高梨勢と合流して上杉憲房軍を破り、憲房は関東めざして妻有庄に敗走する。これを救おうと頼定は越後国府を出発するが、長森原（六日町）で政盛に討たれ敗死する。このとき、長森原の牛頭天王社（祇園社）に戦勝を祝った故事が、中野祇園祭の始まりと伝えられている。このように、政高・政盛の二人は剛勇の将として、中野を中心に支配を強化した。

永正10年（1513）、越後守護上杉定実や村上氏を黒幕として、中野・夜交・小島氏などの反高梨党が反乱をおこすが、重臣草間氏などの機先を制した動きにより鎮圧された。これにより、長い間中野の地を支配してきた中野氏は完全に没落し、高梨氏が中野地域を制圧したようである。

4. 高梨氏の落日

天文22年（1553）には、村上義清の本城、埴科郡葛尾城が武田氏の包囲網のまえに自落、村上氏は高梨政頼をたよって越後に亡命した。武田氏は、村上氏を追って塙田城（上田市）を占領し、ここを川中島地方攻略の拠点とした。こうして上杉氏の拠点、春日山に近い川中島地方は甲越争奪の戦場となってきた。

同22年には、第1回の川中島の戦いが行われ、長尾氏と武田氏の兵が更級郡八幡で戦っている。弘治元年（1555）、中野の後背地を領する小島、夜交氏なども武田氏の軍門にくだり、この前後、高梨政頼も館・山城をすべて飯山城に退去したとみられる。

川中島の主な戦いは、前後5回行われたと伝えられるが、いずれも失地回復をめざす北信濃武士を先頭にたてた戦いで、永禄4年（1561）9月には、八幡原で上杉と武田方が激戦を展開している。

こうして、越後に退去した高梨政頼であるが信濃当時の高い武門の家格により、高梨氏は越後守として村上氏に次ぐ、第3位の高座次として優遇されるが、上杉氏にたいし臣下の礼をとる身分になってしまう。

これより30年ちかく信濃国は、武田氏による領国支配が行われた。

天正4年（1576）11月、政頼は没した。同6年（1578）、この頃、織田信長の勢いはますます強大となり、同9年（1581）、越中から越後に出陣しようとして高梨喜三郎（政頼長男か）に協力を求めたため、喜三郎は景勝に誅され、一説には頼親があとを繼いだと考えられている。

5. 高梨氏故郷へ帰る

天正10年3月、織田勢は高遠城（伊那郡）を攻略し、諏訪から甲斐に攻め入って、武田勝頼は滅亡する。ついで川中島地方も織田軍の先鋒、森長可の占領するところとなるが、6月「本能寺の変」で、信長が滅びると、長可は本国の美濃をめざして逃げ帰った。ここに川中島地方（北信4郡）は上杉景勝の領有に帰し、高梨氏は約30年ぶりに故郷に帰住した。同18年前後、安源寺館（中野市）にいた頼親は、先住の地、小館を一族の菅小島氏から譲りうけ、小島氏に同族紋幕の使用を許している。

秀吉は慶長3年（1598）1月、越後・佐渡と北信4郡を支配した上杉景勝に会津（福島県）へ移封を命じた。信濃への還住も約16年にして、高梨氏をはじめ北信濃の諸氏は、父祖伝來の地を遠く去って行った。

第2節 高梨氏と京文化

1. 幕府要人との交際

高梨政高は寛正6年（1465）、室町幕府の奉行人伊勢貞親と交際があったとみえ、訴訟の件で馬を贈っている。政盛も文明10年（1484）、若王子社（京都）の仲介で、貞親の執事鰐川親元に物を贈っている。

また文亀3年（1503）、越後国の高梨刑部大輔政盛は「古今集」書写の礼として、当代一流の学者三条西実隆に金子500疋（10疋が1貫文）を送進している。

2. 連歌と宗祇・宗長の来館

連歌の宗匠飯尾宗祇は実隆と親交があり、その影響をうけた政盛も連歌に関心があった。宗祇の高弟の柴屋軒宗長は文亀2年（1502）、長尾家に滞在していた病身の宗祇に同伴して草津に赴くが、その途中、あるいは高梨館を訪れて旅の疲れをいやしたのではなかろうか。その後永正12年（1515）3月から4月にかけて、宗長は村上氏の坂木（坂城町）を経て高梨館を訪れ、和漢連句・千句会をおこなっている。ついで高梨氏の藏王権現鎮守の寺（湯田中）に招かれて、連句をおこなっている。

3. 三条西実隆に学ぶ

地方豪族の中央志向は、乱世とはいえ相当なもので、澄頼（政盛か）は永正16年（1519）将軍義植に馬2匹を贈っている。また大永3年（1523）には、高梨氏の家人僧が実隆に金100疋を謝礼、ついで『伊勢物語』の講談に出席し、翌日の帰国に際して、記念に扇面の和歌、短冊を贈られている。

4. 宮中への献金

高梨政頼は天文13年（1544）、禁裏（朝廷）修理工料として金 5,000疋を献じ、從四位上に叙せられている。後奈良天皇の献金勅銘についての倫旨案は次のとおりである。

勅修守入道大納言（藤原尚顯、栄空）為ニ御使ニ被ニ差下ニ候、禁中御修理事、存ニ別忠申付候者、可ニ為ニ神妙ニ之申、天気所候也、仍執達如レ件、四月廿日（天文13年）石中辨晴秀（藏人菊亭藤原）信濃國高梨殿

5. 石山本願寺を訪れる

年次は明らかでないが、高梨政頼は、飛鳥井雅教の門弟となり、麒麟（けまり）の葛袴（くずばかま）鶴脣（かもぐつ）の使用を許されている。

天文22年（1553）、政頼は岩井氏をつれて石山（大阪）本願寺に先教上人（證如）を訪れている。

『證如上人日記』抄

（政頼）巡見のついでに礼（ご機縁伺い）に参ることで対面した。高梨は太刀と金子 1,000疋持ち来り、同姓岩井民部大輔は太刀と金子 100疋を持参した。そこで酒一献と湯漬を接待した。その法式は高梨方から前もって自国流でお願いしたいと申し入れてきていた。初献のお盃は両度子（證如）が飲む。この時高梨がお酌をする。その後で、高梨、また子であった。この時敷居内へ岩井を呼びよせ、また小間間頼資（しもつまよりすけ）を相伴に敷居の内へ呼びこんで盃をすすめる。次に二献、湯漬（七与引汁二膳三）となり一札し、上人の酌で高梨初めてさす。次に上人飲む。次に岩井・頼資、また高梨また頼資、また岩井・源二また高梨（この時茶子を出す）、筑後、また岩井房二郎で飲み納めとなる。若党共は十余人綱所にて肴で盃をかわす。（中略）そのあと政頼らは奥の間で寝殿を見物、さらに裏庭を一見する。ちなみに、当時の本願寺は要塞化した巨大な寺内町として発展していた。のちに大阪城がここにつくられる。

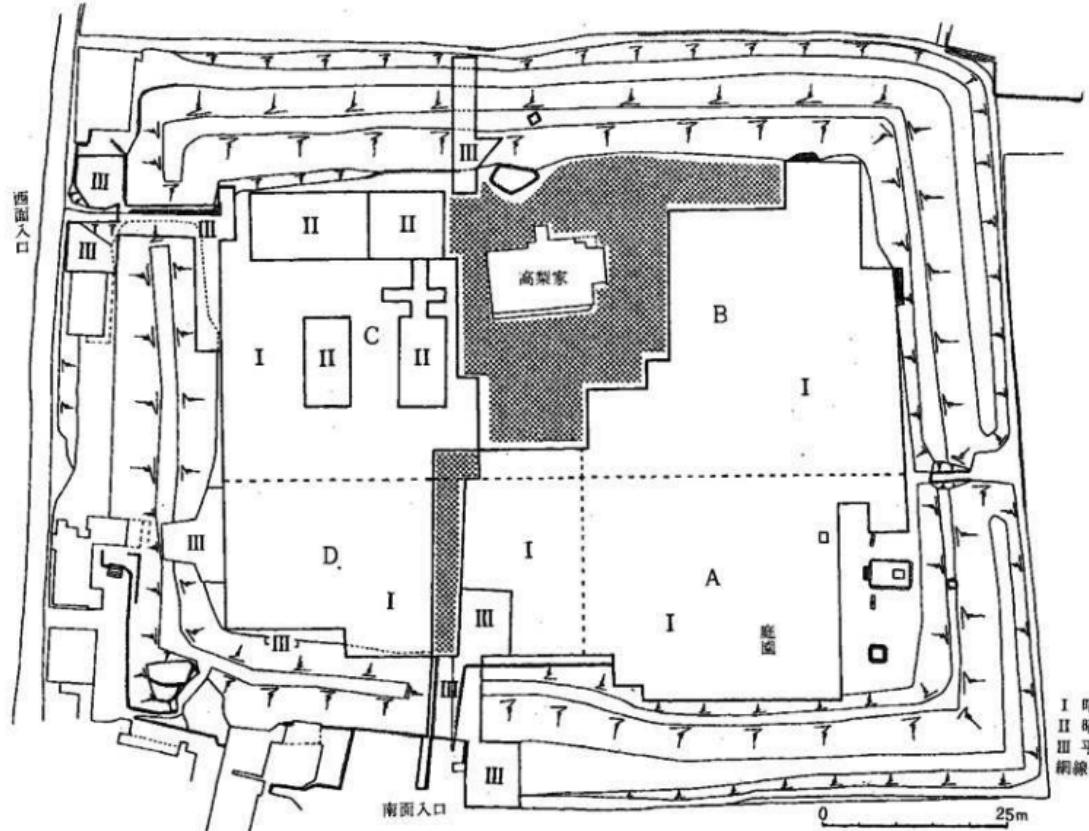


図4 館跡と調査区

I 昭和62年度調査
II 昭和63年度調査
III 平成元年度調査
網線部分 未調査

第III章 高梨氏館跡の発掘調査の概要

第1節 遺構

当初から復元整備を図ることを目的としていたため、内郭部をA・B・C・Dの4調査区に設定し、第1遺構面まで掘り下げ調査を行っている。

1. 建物

建物全体の配置状況は、調査年次中途ということと、中央部に居宅が現存するため把握されていないが、礎石の方向や層位によって、2時期の存在が確認されている。しかし今後の検討によっては、それ以上の可能性を考慮しなければならないかもしれない。

礎石は火熱をうけているものと、いいものとの2種類があり、残存状態もこれまでの調査範囲では、かならずし

も良好とはいえない。

西側のC・D区にわたって東西25m、南北50mに礎石の見られない空白な地区が存在するが、それ以東に礎石群が検出されている。

したがって主要な建物は、中央部に存在したらしく、高梨家新築工事のため、昭和63年度調査したC区の中央

南において、柱穴などを検出した。しかし遺構が深いため、館の築造時期にはなお検討が必要である。この東側でも礎石群を検出したが、その東は居宅があり未調査で、主殿部の建物の様式・配置は確認されていない。

倉庫は郭内の東北のB区に存在したらしく、ここから多量の炭化した米・大麦・豆類などが出土、火熱をうけた床面も検出された。

建物跡内には河原石を並べた水路がみられ、水溜跡も5か所確認された。



7 調査風景



8 焼けた礎石



9 純 石



10 館跡中央部の礎石群



11 C 地区の礎石

○礎石は、配列の方向や火熱をうけているもの、そうでないものなどから見ると、2時期以上の建てかえが考えられる。

2. 庭園

庭石が残存していた庭園は、郭内A区東南部にあって360m²程を占地するが、そのうち池の面積は約90m²程である。

庭石の多くは、明治になってから館外に運び去られたと伝えられ、また高梨政道歌碑の台石にも使用されたため、大きなものとしては中央南側にある「立石」（高さ約2m幅1.7m）と、伝え落ちの上にある3個の組石が残っている。あとは池の汀線の石組みと残存する副え石により、石組みの配列が推定される。

池の護岸は直径50~70cmの河原石を用い、要所に山石を配して「亀形」の複雑な汀線を構成している。浅い池と推定されるが、掘り下げてないので、深さは確認できない。

池の周辺には回遊の園路が設けられていたようで、河原石を並べて緑石とし、水路にも蓋い石がみられた。^{いた}

池の配水は東北方から溝で導入し、池の東で水溜めを設けて水位を調整、石組みの外側に水路をめぐらせ、石組の間から水を落とさせている。このほか、「中島」と考えられる石組もあり、優雅な感じをたたえている。

平成元年度(1989)の南面入口部の調査では、築地壟に続く石組とヒョウタン形とも思える池が出現した。長径6.2m、短径2mの小さな池で、石組が袖に残っており、池は深く埋没していた。このため、前述の庭園より古い時期の遺構と推定される。



12 西方からみた庭園の全景



図5 庭園実測図



13 発掘調査前の庭園



14 池の景石

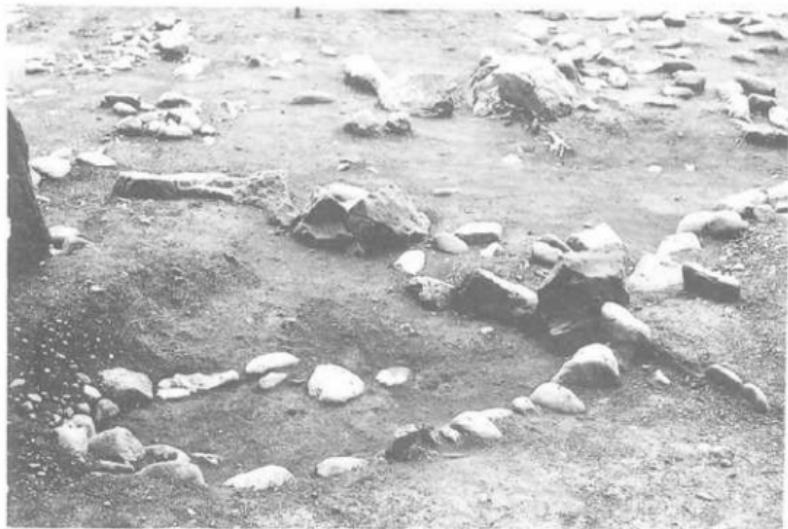
○池の要所に配された石、
上に亀が乗っているよう
にも見える。



15 池の南側に立つ大きな立石



16 滝口付近の石組み



17 池の南側部分



18 東側からみた庭園

○池の部分に高梨政道歌碑があるため、池のかたち、築かれた時期などは、
今後の調査が期待される。



19 庭園東の水溜跡

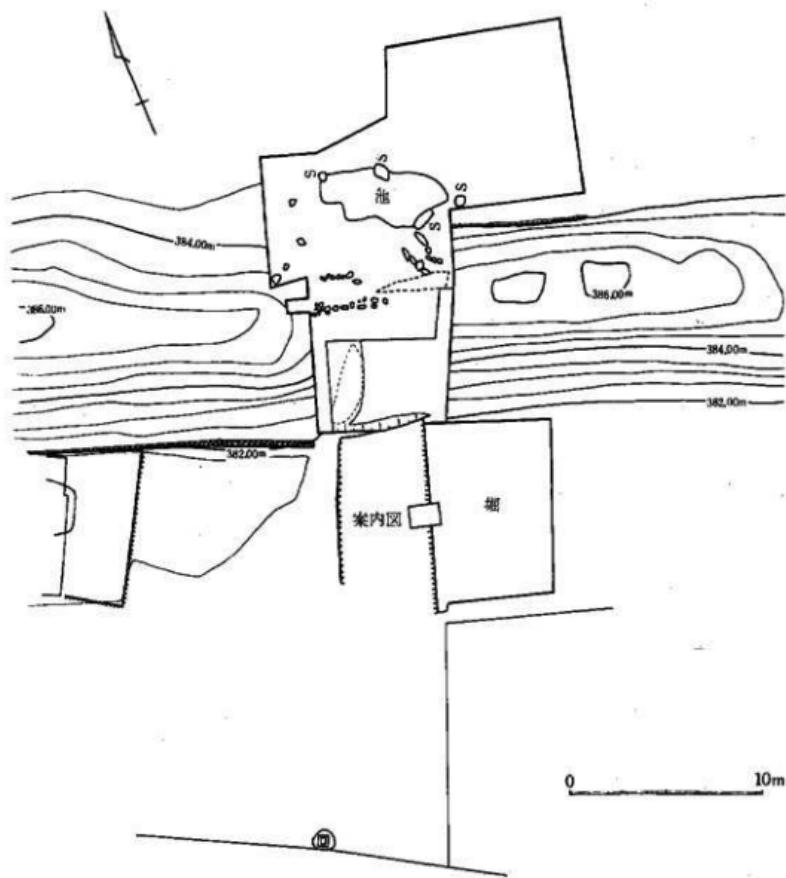


図6 南面入口調査区実測図

○ここは從来から大手門のあった所と考えられてきた。しかし調査の結果では門の造構は検出されず、小さい池があった。したがって、築地塀のあった時期に小規模な入口があったことが想定されるにどまっている。今後の課題となろう。

3. 入り口・門

入口と推定される4か所のうち、背後の^{つねじき}（山城）に通じる東の通路は未調査であるが、南と西の2つの通路は平成元年度に調査した。

〔南面入口〕

南面入口は、築地塀の存在した時期には小さい通路があった可能性もあるが、土壘が大規模に築造された時期としての入口は確認できなかった。



20 発掘調査前の南面入口

〔西北面入口〕

西北面入口の土壘北側には、前項で述べたような石積みがあって、裏に多量の石礫が積まれていた。この奥と南側の両袖に、高さ約1mの土壘土留めの石積みが廃絶時のまま残存し、一部は、転落していた。入口の幅は3.5m程度で、内部はやや拡大しており、その中に門の礎石が、土壘の外郭線に合わせて据えられていた。外側の2個の礎石面径は50×80cmで、内側の2個の礎石はこれより小さく35×45cm程度で、高麗門・薬医門^{ヤクイモン}・櫓門などのような門があったのではないかと考えられている。門の幅から考えると、あるいは臨門のかも知れない。

この門の周囲からは鍵・鉄釘・炭化材、壁土の焼けたものなど検出され、礎石の周囲の積み石も火熱で剥離した部分が見られた。



21 西面北入口の門の礎石



図7 西面北入口実測図

►22 西面北
入口南側
の石積み



◀23 同入口北
側の石積み



►24 同入口北側
の石積みの崩
落状況。南側
もこのように
崩れていた。



この両袖の石積みは、野石乱積みである。門の南側の礎石の部分は、門の幅に合わせて内側は二重の石積みになっているが、この部分はほぼ整層積みの技法となっている。

こここの土橋は、現在幅2m程であるが、もとは門の幅に合わせていたらしく、南側の下半部に野石積みを残している。その上半部と北側は後世のもので、落し積みの手法で積まれ、^{のりのん}南側の空堀りの土壘の下部法面にも、この手法の石積みが残っている。

この土橋の南と北の堀の深さは1m以上の落差がある。北側の堀の調査結果では、堀底の部分に20~30cmの山土の粘土を敷いてあるところもあり、これにより館の北の堀には、わずかながら水が溜っていた可能性がある。



25 北面北門礎石上の炭化物

○西面北入口の写真21~27の部分は、門焼失後の廢絶の姿を残していた。両側の石積みも崩れたままであった。門の部分から焼けた壁土が検出されているので、門には壁が塗られていたと推定される。土橋の部分には後世の石積みが残されている。



26 同五輪塔の空輪部分出土状況(北側石積み)



27 同鏡の出土状況

〔西面南入口〕

平成元年度（1989）の事業で行っている、高梨館跡の整備事業の実施に伴って、3月南面入口西方内側と、同内側の土壙整備を行ったところ、土壙裾部に石積みが露出したため、調査区を限定して緊急発掘を3日間実施した。

まず、南面入口西方内側の土壙裾部（調査幅4m）の石積みの石は、他の館内の石積みの石より大きく、河原石の中に山石（箱山方面の石）が2個あり、大きい方は80cm角の大きさであった。

つきの調査地点の入口部分は他よりも土壙がやや低く、外側の空堀内に「羽片家」と不動堂が存在している。

この調査結果は、内側より見て左側（調査幅約3m）の入口南の石積みは直角をなし、検出した石積みは2段で、上段に箱山産の石（幅95cm・高さ50cm）を据えていた。

西面南の入口南側の調査幅は5.7m、その東角から約3mに石積みが残り、その奥に綠石のような石が3個並んでいた。この石積みの線から95cm内側に排水溝（幅15cm）が平行し、西側にわずかに傾斜していた。

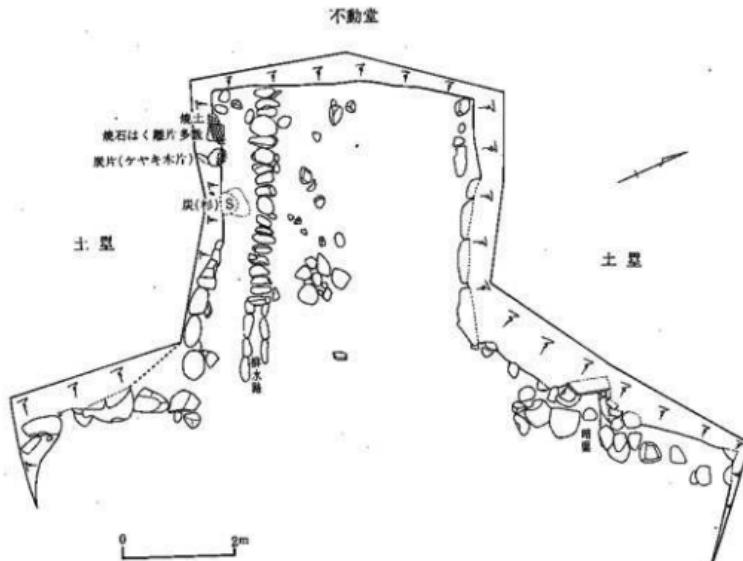


図8 西面南入口実測図

北側の石積みは4個のみ残存し、北東方向に弧を描いて配列されていた。最大のものは幅110cm、高さ45cmであるが、一部抜き去られていた。この西側にも碌石が4個並んでいて、鉄釘・炭片などが検出された。この南と北の石積み間の幅は4.5mあった。「高梨文書」に出てくる「大門の次第の事」の冠木門の幅1丈3尺が、内側に造れる広さをもっている。いまのところ大門の推定地として有力視され、今後の課題となろう。

この北側の石積みから2.4m北に、平行して大きい暗渠（幅75cm・高さ60cm）が設けられ、土壌掘部の石積みと連結していた。なお、堀には土盛り遺構がなく、木橋だった可能性がある。今回の調査は、将来の整備計画の参考とする目的もあり、その主旨にそって無理な拡大調査を行なわない方針のもとに、市有地外に寺以上の調査に必要な面積を残している。この調査によって、西面北入口門とともに、戦国時代の高梨氏館は、山城を背にした西が正面の大手であった可能性が強まった。したがって、この入口の南側の土壌角には防備上、櫓が設けられ、南西内側の土壌石積みも見えたのである。大きな石が使用されていたものとみられる。前面の町場は横通り（谷街道）が主幹街路と推測されるので、中世高梨城下町の景観ともかかわる発見であったと考えられる。



28 西面南入口全景



29 西面南入口内側の南袖石



○門の袖石も大きく、
東方へ続く土壘裾の
石積みの石も大きい。
大門として積まれて
いた可能性がある。

30 同入口の北袖石と暗渠



31 同入口の南土壘内側の据石積み



○この石積みは、残存状況はあまりよくない。しかし使われている石が大きいことや、入口の幅から見て、ここが正門として使われていた時期があったと考えられる。

32 西面南入口南側の石積み・排水路



▶33 同入口北側の石積み

4. 築地壠

南面入口の土壘断面は、調査によると基底幅（敷）は約9mあり、その中央に築地壠の跡が発見された。

こここの地層は、下から砂利混合土・黄色土・黒色土などが自然堆積し、それより上は人為層である。ここからは中世土器片が多量に見られ、土器片・古銭（嘉祐元宝・景德元宝）・炭などを含む鍵層を検出した。この鍵層は鉄分の沈着した旧堆積土で、5~10cmの厚さとなっている。

鍵層は南側から築地下部で断絶していた。この上層からも土器片が検出されている。この面上に築地壠が築造され、基底幅で1.3m、高さ2.2mが残り、外面はほぼ垂直で、内面はやや法面があり、天端は崩れている。

山土の粘土を多量に混ぜて版築し、礫をわずか混入して築造されている。築地の下から土留めの石列があることも確認されている。

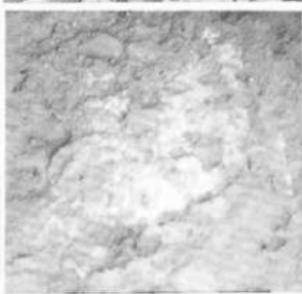
南側に幅1.1mの水平面が見られ、犬走りと推定されるが、統きはゆるい傾斜をなし、堀面で終っている。築地の築造時期には、現在見られるような空掘はなかった可能性が強い。また、築地の南壁下には、築造時の遺構として深さ50cmの柵の柱穴が確認され、土器片が混入、その他5か所の柱穴も検出された。

左右の築地堀の北壁には漆喰か白土が塗られているが、現在の通路敷(1.5m)を除いた地面にも漆喰が確認されている。したがって築造時期には屋根があったと推定される。この壁面から前述の石組・池が連っていた。

このように築地堀があった時期には、この調査地点に、小入口などがあった可能性もある。しかし築地堀の存続期間には築地堀がどのような形で、どこまで延長されていたのか、未調査のため不明であるが、今後の調査に期待される。



34 南面入口東側の土壘断面



35 漆喰？のあと

○中央にあるのが築地堀で、幅1.2m、高さ2.2mである。築地堀の下に5~10cmの厚さの泥土（鉄分沈着）・炭、中世土師器片が多量に、また北宋錢の景德元宝（初鑄年1050）が2枚、嘉祐元宝（同1057）、熙寧元通（同1068）が各1枚検出された。ただし火焼で錆び、文字不鮮明である。これは年代の手がかりとなる「鎌層」である。

南面入口東土壙の層序

- I 表土
- II 第2層砂礫層
- III 第3層腐蝕砂土茶褐色土
- IV 第4層砂礫層
- V 第5層黒色、黄色土
- VI 第6層砂礫層
- VII 第7層黒黄色土
- VIII 第8層灰褐色土
- IX 第9層黒色土
- X 第10層黄色土
- XI 第11層地山砂礫層
- XII 茶褐色土
- XIII 黒色土
- XIV 黄色砂層
- XV 灰褐色土
- XVI 黄色土

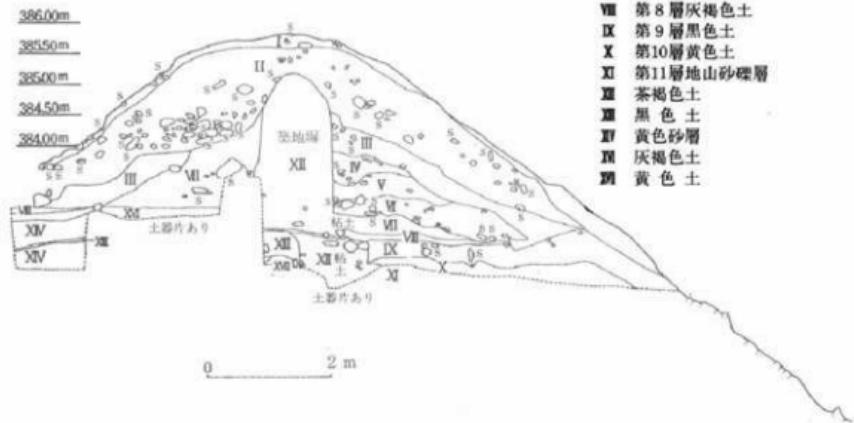


図9 南面入口の東側土壙断面図

西側には土留め石が2列並び、漆喰の残る築地塀があり、築地塀と同時期と推定される小池の配石が西東に接続していた。黒土の中に黄色土、石の埋まった柱穴も存在し、東側に続いていた。



36 南面入口西側の土壙

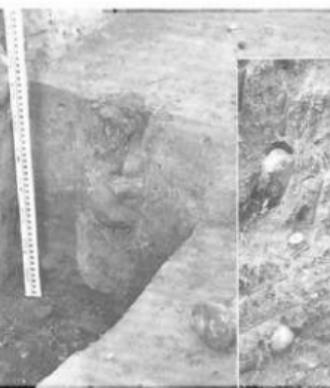
○南面入口内部に小さな地が現れ、配石は築池に続いていた。北側には礎石が続くが、この礎石群には高低差、方向からみて2つの時期が存在する。



37 南方からみた南面入口の小さな池



38 同西側の柱穴跡



39 磚層の古銭出土状況

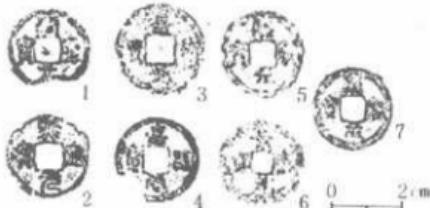


表1(古銭一覧表)

銭名	初鑄年	出土地
1 開元通宝	唐 621	北面土壘南
2 聖寧元宝	北宋(韓書) 1068	同所堀層
3 嘉祐元宝	同 1057	南面入口池端
4-6 景德元宝	同 1005 同 1068	"
7 景德元宝	同(京銭) 1004	南面入口池端

図10 古銭拓影図

5. 堀

堀については平成元年度に3か所を掘削し調査した。いずれの地点も江戸後期までは、かなり旧状を保っていたらしいが、その後急速に埋られていた。南面の調査点では、表層、石炭ガラ層が約0.5m、石礫に近世の陶器・瓦片の混った層が1.4mある。それ以下は中世の層が0.8m堆積していて、それとその底部から珠洲窯系・常滑窯系の陶器、輸入青磁片などと、中世土器片が検出されている。

堀の断面はV字形で薬研堀の形を示している。底の部分から高さ1mあたりまで、厚さ10cmの黄色粘土が張られたようになっているが、これは漏水防止でなく、砂礫土のため崩落防止の措置かとみられ、空掘であったと考えられる。

この堀底まで土壘上から7.4mの落差があり、戦国時代の構えのきびしさを表わしている。堀の幅約8.5m、南の平面からの深さは約3mである。

北面の調査地点の堀は、表層から堆積黒土層が1.5m、黄色粘土層が0.7mで、外側に広がっていたが、道路と宅地に遮られて調査はできなかった。嘉永年間に開かれた諏訪町の屋敷剤以後、狭められたらしく、復元すれば堀幅は7m前後とみられる。土壘上から堀底までは4.25mの落差で、断面は現段階ではU字形のようであるが定かでない。



40 東面の土壘と堀跡



41 発掘調査前の北面土壠と堤



42 発掘調査後の北面堤の断面図

► 43 西面北入口
の土橋北側の堀
跡と土壘（隅櫓
跡）



▼ 44 同入口南側
の空堀の石積み
○中段以下が中
世の石積みと
みられる



○この堀も近世末期頃から急
速に埋められたようであり、
石礫のみられない部分から
下層が中世の埋没層となっ
ている。



45 南面入口東側の空堀断面

西面の調査地点では、堀幅約8m、土壘上から堀底まで4.6mである。ここは中世層も石で埋っているが、あるいは土壘の外法の石積みが崩落したためかもしれない。落し積みの石積みについては、前に述べたとおりである。土橋の北側の堀とは1m以上の差があつて深く、底はU字形を呈しているかのようである。

この入口の通路面から両側に犬走りの石積みが残っているが、中世までさかのほるか定かでない。

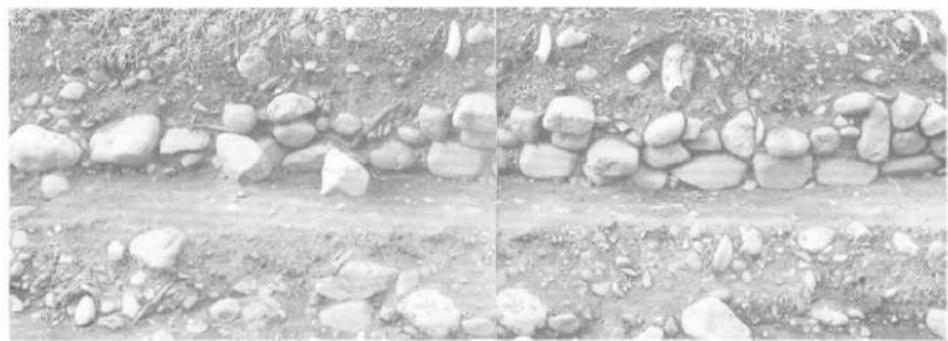
6. 土 壈

北面と南面の土壘の構造を調べるために、平成元年度部分調査を行なった。

北面の調査前の土壘は、内側は傾斜がゆるやかであるが、外側は急であった。しかし調査してみると、基底幅（敷）7.5m、内側の旧地表面からの高さは約3.9mであった。途中1.5m上った位置に幅1m程の武者走りと思われる段が設けられており、高さ70cm程の石積みをめぐらしている。この位置から下方に中世の土師器の皿・耳皿・灯芯押えなどの灯明皿が、炭と混つて多量に検出された。



46 隅櫓があつたとみられる西北の土壘



47 西面北入口の土壠内側の石積み



48 北面土壠西側断面



49 北面土壘南内側の調査地点



50 同中段の石積みと武者走り

土壘の断面は、底辺（敷）の外側（外敷）から全幅の各を基底として、高さ約1.2mに砂利層と土層が交互に7層序を数え、これをたたき締めにして築造されていた。これは、わが国の盛土古墳の築造以来の伝統的な古い手法である。その他寺の内法の部分と頂点（樋）までの1.3mは、土砂混合した土層で、2回の築造時期が考えられる。なお、この外法には大走りは確認されなかった。

従来、大手（大門）と考えられてきた南面入口の土壘断面の築地塀の両側の部分は、砂利と土の互層をもって築造されている。北面の土壘の下部構造と同様に、上層と両側の法面（最大厚さ1m）は、刷状地特有の砂利層からなっており、空塁の部分の砂利をかき上げてできている。この南面入口では、3時期にわたり擁護壁の普請が行れたことになろう。

東面の土壘はまだ断面調査を行っていないが、前に述べた、米などの貯蔵庫の礎石が土壘際まで残っている。そのため土壘の内側は、河原石による野石乱積み手法の法面がない、高さ1.5m程の石積みとなっている。石積みは焼けた敷地面から積まれていて、東面入口から北東隅までの範囲にわたると推定される。

この調査地点での土壘の高さは、現在、内側から2.2mで、石積みの上層は砂利層であった。土壘の外法面は45度前後で、下部は薬研塀になっており、土壘上から現状の塀底までは4m強の比高差がある。



○石積みの根元まで
焼土がみられ、こ
の南西部から、焼
米などが多量に検
出された。

51 東面の土壘内側の石積み

7. その他の遺構



52 B地区の水溜跡（手前A、奥がB）



53 水溜跡Aの遺物出土状況



○水溜の底から、中
世土師器3、銅鏡
1個が出土、銅鏡
の中には、黒漆塗
りの木製椀の残欠
が2個分重なって
いた。 →

54 水溜跡Aの断面



55 水溜跡A出土遺物 左：佐波理鏡、右：壺



56 中央部北（B地区）の雨落ち構造と水路



57 中央部北（B地区）
の水路の敷石

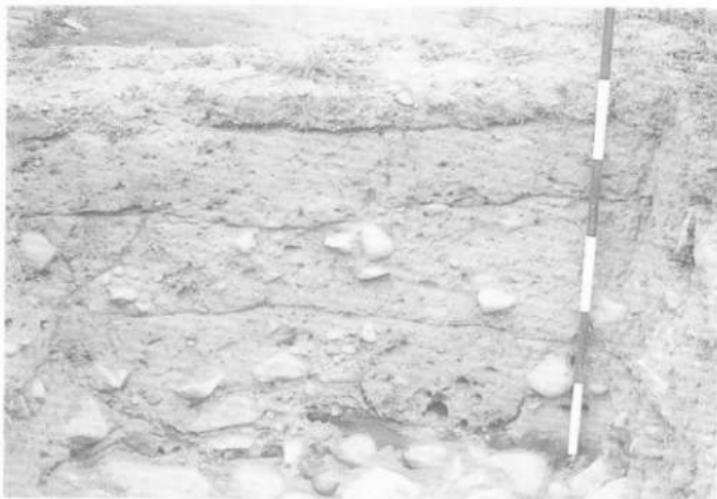


◀ 58 井戸北側の水路



○右上に池のあと、
建物の礎石には
2つの時期がみ
られる

59 南面入口内部の礎石



60 館内中央東の試掘坑（かなり複雑な状況を示している）

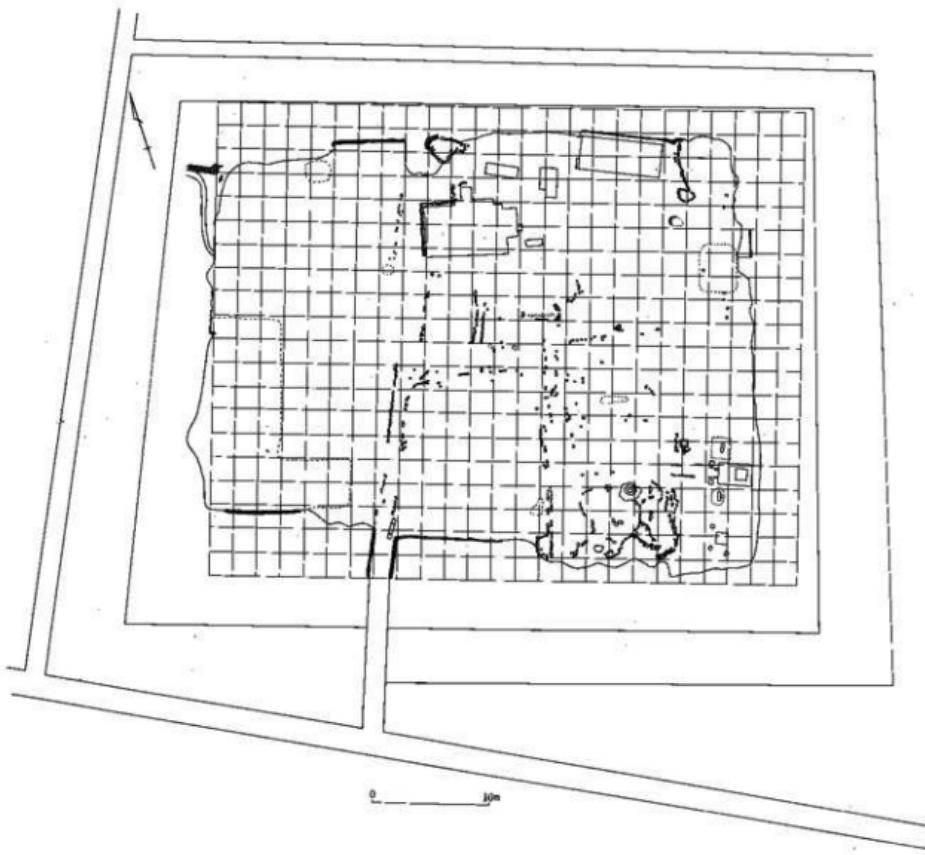


図11 館跡と遺構の実測図（昭和63年度調査まで）

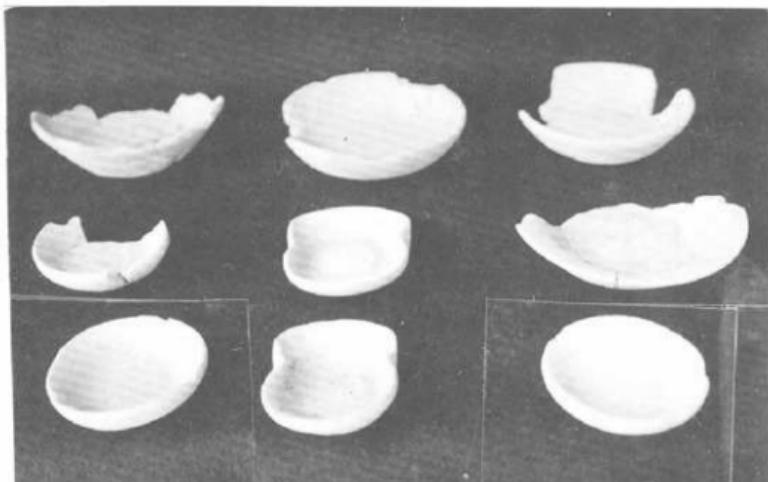
第2節 遺 物

館が市街地に囲まれてことと、現に居住者がいることから、近現代の陶磁器をはじめ、多くの廃棄物や遺失物が出土する。しかしここではそれにふれず、中世に限って述べる。

1. 土 器 類

中世土師器は郭内の各所から広く出土するが、多量に検出されるのは建物跡からである。とくに集中的に破碎あるいは完形で検出される地点があることは、注意を要する。北面の土星内側の集中地点については前に述べたが、東面の入口と考えられている通路の内側には、7 mほどにわたって、炭になどに混じって灯明皿の類が出土している。

また、水溜跡の深さ 1 m余りから出土した壺 3 個、佐渡理碗 1 個と、これに重なっていた木楕残欠が注目される。この壺は、土器の中では古相を示している。これらを含め館内その他の出土品は、瓦質土器・羽口・内耳土器や、建物跡から出る焼けた壁土の塊などである。

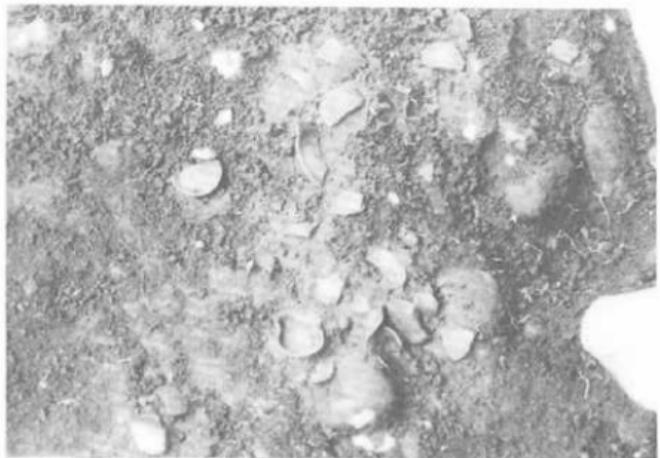


61 出土遺物（灯明皿）

► 62 東面
入口内側
の中世土
師器の集
中出土状
況



► 63 北面
土塁裾部
の中世土
師器集中
出土状況



2. 陶 器 類

館跡内から出土する青磁・染付などの輸入陶磁器は、建物跡を中心に出土するが、これまでの調査では細片となって出土する例が多い。青磁・染付類は、市内の小曾崖城跡からの出土品に比べると新しい。下水内郡豊田村の替佐城跡出土品（未発表）は、上田市塩田城跡出

土品とほぼ同時期と推定される。小曾崖城跡のものが14世紀から15世紀後半にかけての陶磁器であると見られ、普佐城・塩田城のものは16世紀を中心となっている。高梨氏館跡の場合は、小曾崖城跡の出土品に続く15~16世紀の移入陶器が多いと推定される。

その他、越前窯系の陶器片・瀬戸窯系の天目茶碗の破片や、珠洲窯系の須恵質陶器片が出土するが、後者は先の3城跡でも出土している。

ついで江戸初期頃と思われる国産陶磁器が、建物跡以外の所から出土している。



64 B地区常滑窯系陶磁器の出土状況



65 B地区古銭出土状況

3. その他の

〔銅 製 品〕

前に述べた水溜跡から出土した佐波理鉢は、直径15cm、高さ5.3cm、器厚1.8mmで、口縁は内側に肥厚している。

釣針は長さ5.0cm、直径2mm強で、かえしは見られない。

銭貨は館内全般から出土するが、建物跡からの出土物には融着したものも見られ、点数も多い。その他、前に述べた南入口の鍵層からの出土銭が注目される。

出土銭種は、開元通宝（唐）・皇宋通宝・熙寧元宝・至道元宝・元豐通宝・元符通宝など、北宋銭が多い。また下限を示す、洪武通宝（洪武元年、1368）・永樂通宝（永樂6年、1408）・宣德通宝（宣德8年、1433）などの明銭も出土している。もちろん寛永通宝も多数出土している。

〔鉄製品〕

釘・斧頭が出土し、鍔が西面北入口の門跡から出土している。

〔石製品〕

硯・砥石・水鉢や五輪塔の空の部分が、西面北入口の北側の石積みから出土し、地輪が庭園東の水路に並べられている。その他、石臼の破片などが各所から出土している。以上の出土遺物を概観すると、南北朝時代（14世紀）から戦国時代末期（16世紀中葉）までの、200余年にわたっている。これと館の存続・変遷とを関連づける編年作業、および歴史的視野にたった考察が今後の課題となる。

表2 〔館跡出土遺物表〕

○鉄製器	珠州窯系 ^{ゆうしゅう} ・青磁・染付
釘・斧・鍔・鉄滓	白磁・越前系 ^{えちぜん} ・瀬戸窯系
○銅製品	天目茶碗・その他陶磁器
佐波理純 ^{さはりわん} ・古錢・釣針	○石製品
筒	五輪塔・水鉢・石臼・硯
○土器	○木製品
壺(24・26・27)・灯明皿(1 ~23)・耳皿 ^{じみ} ・灯芯押	椀残欠
え・瓦器・内耳土器・羽 口	○植物遺物
○陶器	米・大麦・小麦・大豆・木 材の炭化物
	○その他 壁土の焼けたもの



66 銅製の釣針

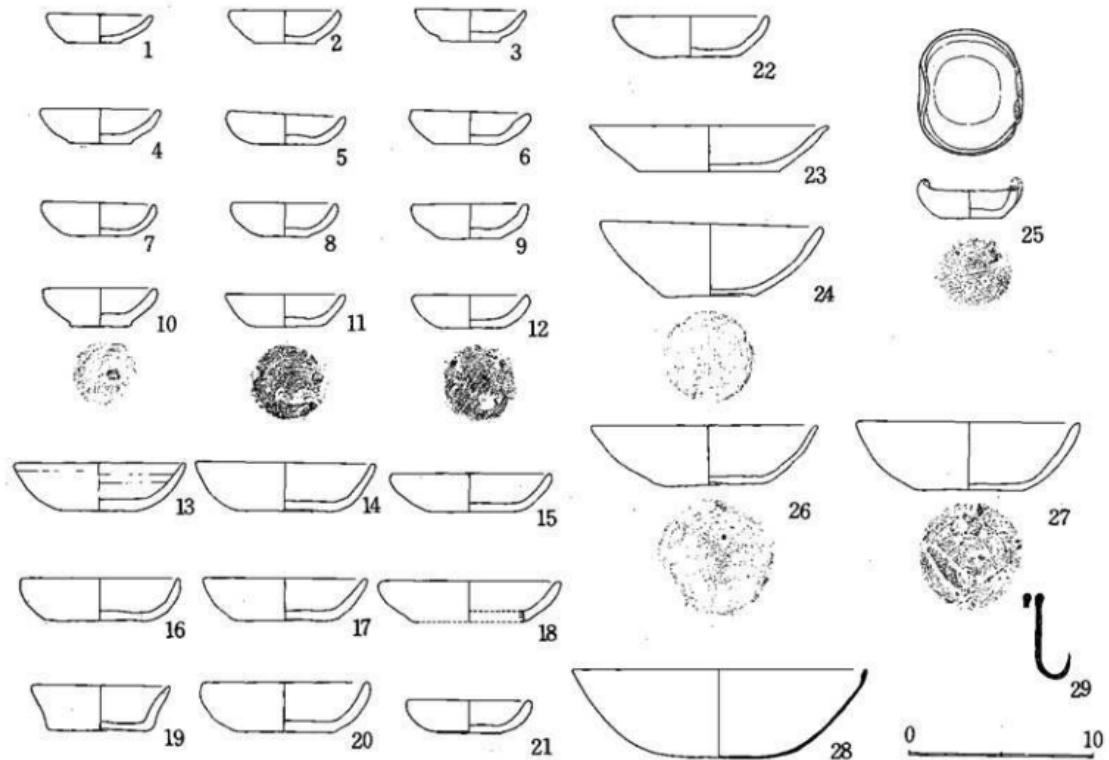


図12 館跡出土遺物実測図

第Ⅳ章 史跡の保存と活用

第1節 公園整備の基本方針と専門委員

高速交通時代を迎え、都市化、市街地化の進展が予想される当市にとって、居住環境の整備が必要となっている。

そこで、誰でも気軽に利用できる憩いの場としての公園、緑地の整備が望まれている。

このたび、高梨家から中野市が一部を譲り受けて、都市公園として市民に開放する整備計画を策定した。

この公園整備にあたって、あらかじめ発掘調査をおこない、また、奈良国立文化財研究所、建設省等の専門家並びに地元研究者を高梨館跡公園整備専門委員に委嘱し、これらの方のご意見を聞き進めている。

整備の基本

- ① 歴史的雰囲気を大切にする。
- ② 県指定史跡を尊重し、埋蔵している遺跡の調査、保護を優先する。
- ③ 近隣住民の日常生活に溶け込み、気軽に利用できる憩いの場とする。

これに基づき、平成元年度から着手し、第1次整備計画では1.2haを平成5年度完成を目指すに進め、その後ひきつづき第2次整備を行ない、1.4haの都市公園とする。

中野市高梨館跡公園整備専門委員名簿
(2年3月現在)

	委員名	役職名
学 識 経 験 者	宮本長二郎	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター建造物研究室長
	田中哲雄	文化庁文化財保護部記念物課主任調査官
	前田博	公害防止事業団工務部工務第3課長
	亀山章	信州大学農学部教授
	金井汲次	市文化財保護審議会会長 高梨氏城跡発掘調査団団長
	金井喜久一郎	県史協議委員 高梨氏城跡発掘調査団顧問
	湯本軍一	県史(中世担当)編さん委員 高梨氏城跡発掘調査団顧問
行政 關係	内田雄治	県教育委員会文化課長
	岡庭正典	県土木部都市計画課長
	飯島平	中野建設事務所長

第2節 公園工事計画

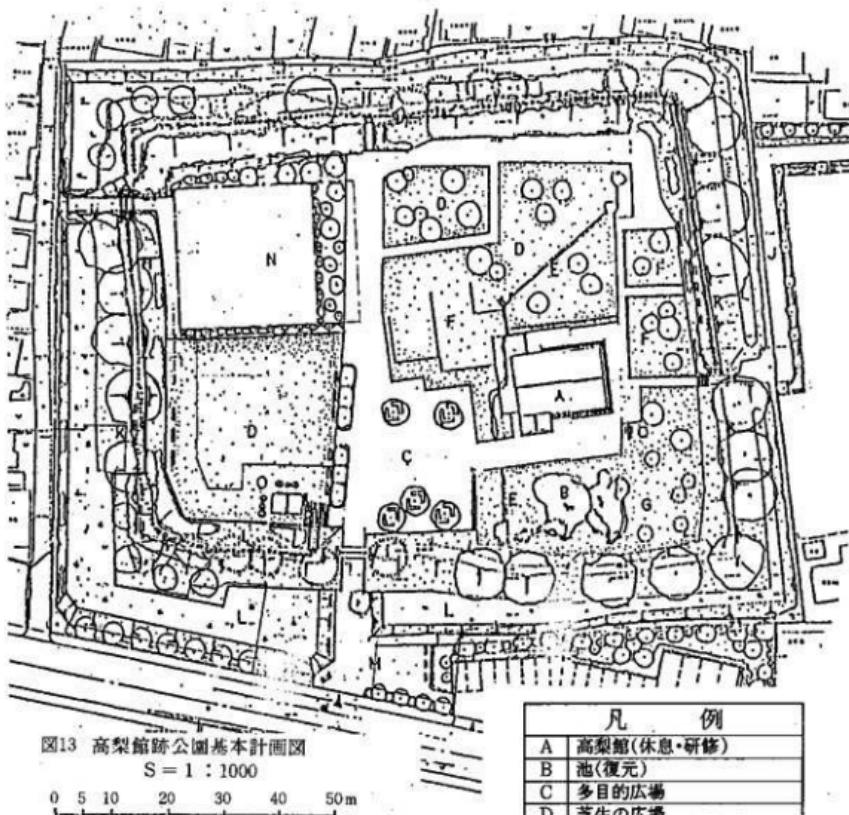


図13 高梨館跡公園基本計画図

S = 1 : 1000

0 5 10 20 30 40 50m

凡例	
A	高梨館(休息・研修)
B	池(復元)
C	多目的広場
D	芝生の広場
E	水路の跡
F	建物の跡
G	和風庭園
H	土壇上の散策路
I	大路
J	散歩道
K	眺め場所とベンチ
L	空堀(漫生植物)
M	正面入口広場
N	除外広場(高梨家住居)
O	便所
P	駐車場
Q	井戸

中野市都市計画公園工事施工計画図

長野県知事決定3・3・2号

高梨館公園

第V章 高梨氏と中野地方に関する略年表

- 平安末期 12世紀前半成立の「今昔物語」に、如法寺薬蓮の説話が載っている。
- 1170 嘉定2 藤原助弘、中野郷西条下司職に補せられる。
- 1181 養和元 4月、笠原頼直勘解由判官に任せられる。頼直、越後の城資職の軍に属し、また高梨らの信濃武士、義仲に属して千曲河原に戦う。
- 1184 元暦元 正月、義仲栗津野に敗死。高梨忠直ら相ついで討死。
2月、尾藤太知宣、中野御牧等を安堵されんことを頼朝に請う。
- 1189 文治5 7月、頼朝奥州に進発し、中野助光・能成・尾藤太知平らこれに従う。
- 1192 建久3 頼朝、藤原助弘を中野郷西条・志久見山の地頭職に補す。
7月、頼朝征夷大将軍となる。
- 1201 健仁元 9月、中野能成、將軍頼家の遊興をいさめる。
- 1239 延応元 5月、笠原貞範、南笠原内田上を知行。
- 1249 建長元 12月、中野能成、中野及び志久見の地頭職を二男忠能にゆする。
- 鎌倉末期 常樂寺所蔵の觀音像成る。（銅造り）
- 1329 元徳元 2月、大徳寺の妙超、慧玄（関山国師）に關山の号を与える。
- 1337 建武4 4月、高梨経頼・中野家氏ら越後に、新田義貞の党と戦う。
- 1338 勝応元 高梨氏の惣領経頼、山田郷小馬場村における一族の田畠論争を、一族衆仲裁にて決す。（高梨氏武家方に属し、官方と戦う）
- 1345 貞和元 11月、足利尊氏、岡本良円に中野郷内の中野尾藤太跡地頭職を宛行う。
- 1347 3 11月、足利直義、中野一族に対し吉野退治に參すべきを伝える。
- 1352 正平7 2月、高梨経頼、北笠原上条郷内夜交村を宛行われる。
- 1357 12 10月、高梨永高、（下）高井郡吉田郷を拝領。
- 1360 延文5 12月、妙心寺開山慧玄（關山）寂す。84才。慧玄は高梨氏の出身。
- 1384 至徳元 8月、これより前、純天全快、上条に高梨氏の善応寺を開く。8月14日寂す。法嗣全俊は高井郡の人という。
- 1392 明徳3 3月、高梨朝高、安田郷等など所得の安堵を幕府に請う。高梨氏一族の所領を詳細に記しているが、中野地方は少ない。
- 1396 応永3 4月、中野如法寺の石造宝篋印塔成る。
- 1400 7 9月、村上満信ら守護小笠原に抗して挙兵する。高梨友尊（朝高）嫡子樟原次郎・次男上条介四郎江部・草間・木嶋・吉田などの一族・家臣500余騎、これに加わり、千曲川等において奮戦する。
- 1440 永享12 9月、笠原本誓寺七世性順寂す。59才。これより前、本誓寺は関東布川から笠

- 原へ移る。(蓮如、本誓寺の寺号を与える)
- 1448 文安 5 7月、高梨本郷(代官江部高秀)など、諜訪上社御射山頭役をつとめる。
- 1449 宝徳元 8月、高梨道高ら一族の規式を定める。
- 1456 康正 2 4月に大熊出羽守高家・新野尾張守国家・高梨近江守高義(岳北中村)ら上社花会頭役をつとめる。5月、高梨治部少輔道朝(江部)ら同5月会の頭役をつとめる。
- 1461 寛正 2 11月、高梨政高代初め。
- 1463 4 12月、越後勢攻入り、信州高井郡高橋(中野市西条)にて、大将上杉右馬頭、高梨政高に討たれる。
- 1465 6 2月、高梨政高、幕府奉行人へ馬を贈り訴訟の事につき依頼する。
6月、幕府、守護小笠原光康に、村上政清・高梨政高を撃つべきを命じる。
- 1467 応仁元 桜沢秀頼(堤郷)らに上社明年的御射山頭役をあてる。
- 1469 文明 3 正月、七瀬の宝塗印塔成る。
- 1476 8 本郷高梨政代始め。
- 1484 16 5月、政盛、山田城(高山村)の高梨日向守高朝を攻めて城を奪う。
7月、政盛、高梨治部少輔に江部村を知行させる。
- 1500 明応 9 11月、高梨政盛夜交景国に下上条・新野高遠・西条・岩船などを安堵する。
- 1503 文亀 3 7月、政盛、三条西実隆に古今集書写の札銭500疋を贈るまた翌年音信を送る。
- 1507 永正 4 8月、前越前守護上杉房能と長尾為景との間に対立あり。高梨政盛、為景に加勢する。
- 1510 7 6月、為景に加勢する政盛の軍、上杉頤定の軍と越後長森原に戦い、頤定を討ち取る。20日、大宝の神前に凱歌を奏す。(中野祇園祭の起源説)
- 1512 9 12月、政盛、夜交景国に再度安堵状を出す。また澄頼(政盛の子)、同孫次郎に中村郷を安堵せしめる。
- 1513 10 長尾為景、守護上杉定実に叛す。
7月、反高梨党の中野氏残党・夜交・小鳴氏ら、定実にくみし、高梨の家臣草間大炊助にとらえられ磔刑される。島津・井上・栗田ら定実にくみす。
- 1515 12 連歌の柴屋幹宗良、高梨館を訪れる。
- 1524 大永 4 長尾為景、高梨政頼(澄頼の子)に合力して信州の乱を平げる。
- 1544 天文13 7月、高梨政頼、禁裏修理料を献じ、その功により從四位上に叙せられる。
- 1550 19 9月、信玄、再度義清を砥石城に攻めて失敗する。この頃不和となっていた村上と高梨の間に和議が成立。
笠原本誓寺の超賢、笠原を出し立加賀の小山御坊へおもむく。
- 1552 21 12月、高梨政頼、上洛をくわだて、金倉・柳沢・江部・岩井・新保・上条・

- 間山などに在京100日の夫役を申付ける。
- 1553 22 開正月、政盛および岩井民部大輔、摂津の本願寺を訪れる。
 4月、村上氏の葛尾城陥る。村上・高梨ら信州の地主、越後へ救援する。
 9月、長尾景虎の軍は村上氏らを援けるために、信州に攻入り、布施・八幡において戦う。秋、謙信上洛する。
- 1555 弘治元 小島修理充、信玄から感状を受ける。修理充ら高井郡高梨の内河南1500貫文の地を宛行れる。
 すりのすけ
- 1557 3 高梨政頼飯山城にあって頻りに謙信に救援を求める。信玄、伊藤右京亮に間山郷を宛行う。
- 1559 文録 2 長尾景虎関東管領となり、上杉政虎と改名（上杉謙信のこと）。
- 1561 4 9月、甲越の両軍、川中島八幡原に激突。村上・高梨・井上・須田・島津ら上杉軍の先陣をつとめる。
- 1564 7 12月、信玄、伊藤右京亮に普地として片塩300貫文の地を宛行う。また西条美作守に新保・小田中を宛行う。
- 1578 天正 6 2月、桜沢・堤など、小田中・吉田・上条そのほか諸郷、諏訪下社の造営所役をつとめる。
- 1582 10 8月、高梨頼親は中野以外の地で、上杉景勝から2000貫文の地を宛行われる。頼親庄内八幡宮に社領10貫文を寄進する。
- 1583 11 3月、高梨頼親、庄内八幡宮神主に擅中へ御駿を颁布させる。頼親、木嶋又次郎に新井・厚貝を原采女と兼帶にて宛行う。
 11月、景勝・常楽寺・安源寺を円慶寺（栗和田）に寄進する。
- 1584 12 5月、景勝、岩井駿負尉に高井郡青田の地を宛行う。
 12月、景勝・大熊・角間両郷の百姓に土貢の軽免を約束する。
- 1586 14 12月、須田満親（海津城代）常楽寺を再興すると伝える。この年、中野本郷・大熊・中村など、諏訪上社の頭役をつとめる。
- 1589 17 10月、頼親、庄内八幡宮（安源寺）の社領100貫文の所を安堵する。
- 1593 文録 2 8月、景勝の臣高梨頼親の部下30名、朝鮮役から帰国する。
 9月、頼親、立神藤八郎（安源寺）に対し、神職・社領を安堵す。
- 1594 3 2月、高梨頼親、舟丸某に牛出村備後分の内20貫400文を宛行う。
 3月、景勝上洛す。この時高梨氏ら数名、争いのため改易される。
- 1597 慶長 2 10月、中野郷常楽寺天庵に、後陽成天皇から「岑月円光禪師」の号を授けられる。
- 1598 3 正月、豊臣秀吉、上杉景勝を会津に封す（120万石）。高梨氏をはじめ信濃の諸将これに従って移る。

高梨氏館跡発掘調査概報

平成2年3月20日 印刷

平成2年3月25日 発行

編集 中野市教育委員会

発行 中野市三好町1-13-19

印刷 高錦堂印刷

